

萩原葉子

蛇の花嫁

蛇の花嫁

九五〇円

著者——萩原葉子

編集人——笠井晴信

発行人——深見和夫

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町八の十
北九州市小倉北区明和町一の一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

第一刷——昭和五十三年十月 十日
第二刷——昭和五十四年五月二十五日

©、萩原葉子 昭和五十三年
落丁本・乱丁本はお取り替えます。

0093—702470—8715

Printed in Japan

蛇の花嫁
目次

蛇の花嫁	7
狐の嫁入り	37
妹	65
棘	89
虹	107
録音テープと女	131
スポット・ライト	141

爪先シューズ 163

新宿放浪記 181

鳩と笛の音 童話

少年と山鳩 童話

あとがき 211

収録作品初出誌一覧

213

203 195

裝丁 金子國義

小説集

蛇の花嫁

蛇
の
花
嫁

衿子は、母親が四人も夫を変えたことが、不思議であつた。今日の母親の怠惰な暮しからは想像も及ばないのである。母の仕事はベッドにななめに横たわり、夕飯の仕度に帰る衿子を待つことと、爬虫類を飼うこと、それに医者通いすることだつた。

「ああ、退屈だわ」

と、母の縞子は日に何回も欠伸する。それを聞くと衿子は、

「若い時は多忙だったのネ」

と、皮肉を言いたい気持ちになるのだ。母は、何故か、過去の男性遍歴を言いたがらない。四人も夫を変え、奔放に生きたことは、衿子が母の行先を捜している時に、分かつたことであつた。

衿子は、いつか或ることを引き出してみようと考えていた。母の三人めの夫で、画家とのことである。その画家は、二十歳以上も年下で、貧しい画学生だったと聞く。母が父からもらった手切金の残りで、一時期画家の卵を養った。

「絵でも画いてみては？」

と、衿子は切り出した。

「えって？ 絵のこと？」

「そうよ、絵の具の絵のことよ」

母は一瞬皮肉な顔で、衿子を睨にらんだ。そして次に素知らぬふうになり、

「絵なんか、卒業したわよ」

と、言った。

強く拒絶するものが、その眼に宿っていた。衿子は冗談っぽく言ったつもりだが、母の反応を見ると、胃がヒリヒリ痛んだ。母に挑戦すると神経性の胃痛を引き起こし、アパートへ戻ると、かわや 廁へ飛び込むのが、習慣だった。今日は勇氣を持って来たのだが、まだ開戦しないうちに負けしていた。衿子は諦めて台所で炊事をしていると、

「アンタの顔、画いてあげてもいいけど」

と、母は氣を取り直したように言い、朋子を呼んでスケッチ・ブックを持って来させた。妹の朋子は母の言いつけを忠犬のように守っている。三歳の時、母の不注意から一生の不具にさせて

しまったが、朋子は母に馴つき、どこにいても素っ飛んで来るのだった。そのくせ衿子の頼んだことは、一度でも果たしてくれたことがないのだ。昨夕口をすっぱくして頼んでおいたキャベツも洗ってなかった。朋子は誇大妄想という病癖があり、衿子を困らせていた。

母は得意な時の長いアゴを更に長くした顔で、3Bの鉛筆を動かしている。箸はし二本しか持たない母が鉛筆を動かすのが、嘘うそのようであった。

「重たいよ」

と、放り出すのではないかと、衿子は恐れた。朋子は、母親を神様ほどにありがたがっているので、余計なことをさせたと、姉の衿子を恨めしい顔で見ている。

機嫌のよい母は、老眼鏡をかけ直し、近々と衿子の顔を覗のぞき込んだ。他人に顔を見られるのが嫌いな衿子は、じりじりと後ずさりしながら、困ったことになったと思った。母と一緒に暮した子供の頃、水疱瘡みずぼうそうにかかり、母は医者を呼ぶ代わりに木植で一粒ずつ水疱を潰した。その時の傷跡が衿子の顔に残っているのだ。

「アンタ、よくもそんな顔でいられるネ」

母は、老眼鏡を外すと怒ったように言った。

初めて、衿子の水疱の跡を見て、いやになったのだ。

「アンタ、その醜い穴は、どうしたのよ」

と、スケッチ・ブックを衿子の膝元に放ってよこした。

なんでも遠慮なしに言う母であるが、衿子は覚悟していてもたじろいだ。ライオンにでも襲いかかられたような、青ざめる思いだった。今更水疱の跡だとは言えない。言ったところで「アタシに言いがかりをつけるのネ」と、逆に喰ってかかられるだろう。母のすることは、もう分かっていた。

「アタシは、美人しか画かないのよ」

「すみません」

と、衿子はあやまった。言ったあと、何がすまないのかおかしいと思ったが、母に逆らうのは、禁物だった。

母の放つてよこしたスケッチ・ブックを恐る恐る覗くと、衿子の大きな眼玉が二つむき出しになっでいて、水疱の跡が、梨の皮みたい黒い点で、強調されている。

「アタシの若い時はネ」

と、母は座り直した。

そのあととは聞きたくない。もう耳にタコの出来るまで聞かされた、銀座を歩くと皆に振り返られたという、自慢話なのだ。

昭和初年の頃、母は今日ならば全裸で町を歩くほど物珍しかった洋装を先端切った。ついでに洋髪から、断髪というオカッパ髪にも変えた。長い黒髪を耳の下から切り落としたのである。人々は、珍奇な眼で母を振り返り、噂うわさの的になってしまったのを、美しくて振り返られたと思っ

ている。

授業の参観日には、衿子は死ぬほどの恥ずかしさを味わった。生徒たちは一斉に振り返り、好奇の眼で笑いを我慢しているが、もう我慢できないとばかり、爆笑が起こる。その爆笑は、衿子に向けて起こるのだった。衿子は自閉症児となって啞^おとまちがわれるほど、口を利かない子供となつたのだ。

「若いアタシを画いてみせようかしら」

と、捨てたスケッチ・ブックを拾い上げると、朋子に持たせながら画き出した。膝の上のせると、重たいからと、持たせるのだった。根をつめることは、絶対にしない母なので、スケッチといつても、ほんの荒い線だけである。

「うわあ！ お母さま美人！」

と、朋子は大声を挙げた。知能は幼稚園児より下なのに、母に取り入ることは長けている。強者につく本能なのだろうか。

「昔のアタシの顔よ！」

母は、今度は大切そうにそつと衿子の前にさし出した。見ると、なるほど美人だった。

衿子の肌のような水疱の跡もなく、昭和初年の頃のモダン・ガールと言われた母が、得意気に微笑している。母には、かなわないと、衿子は思った。目的は画家とのことを引き出したかったのに、母の独壇場になってしまい、結局は母の意のままにしかならなかったことを、無念に思った。

衿子が家に入った瞬間、強い香水と母の匂いが鼻を突いた。母の白粉にまみれたような体臭が、時に息づまり嘔吐すら催すことがあった。白粉をつけない衿子は、家の中が白粉の匂いによってゆくの、母に占領された証しと考えていた。母は、珍しく着物を着ていた。

「あら、来る時は電話してくれなくては困るワ」

ピンクの小衿をかき合わせ、バツの悪い顔で、衿子の眼から逃れて納戸へ姿をかくした。誰か来ているのかと、衿子は重い買物籠を下げたまま、入口に佇ただんだ。

衿子が家に帰る時の入口は台所の下の方の扉だった。上下二つに分けた扉を一緒に大きく開ける時は、母が帰った時だけである。電話しなくては帰れない家になってしまったのか。

と衿子は意表を突かれた思いだった。電話するのには、家と反対方向の電話局まで数分も歩かなくてはならない。衿子は、仕事の連絡で一日一回は、まとめて掛けに行くのが日課だったが、家に帰る時に掛けにゆくとなれば、二度も逆方向に歩くむだがある。そんな暇はなかった。ようやく入った家の電話だったのに、母のために引いたような結果で、衿子はいつも不自由ばかりしていた。電話が開通して数日めに、母を家に引き取り、衿子が家を出たのであった。四畳半の台所もトイレもない北向きのアパートである。